

聖書：使徒 17：16～34

説教題：天地の主が命じていること

日時：2014年5月4日

パウロのアレオパゴスにおける説教は使徒の働きの中でも特に注目される説教の一つです。アテネはソクラテスやプラトン、アリストテレスなどの偉大な哲学者たちを生み、育てた町として有名です。紀元前146年にローマに征服されて以来、黄金時代は過ぎ去っていたとは言え、まだまだ以前の名誉を保ち、人々を魅了していた町でした。その町でパウロはどのように宣教したのでしょうか。ユダヤ人に対しては旧約聖書に訴えて、預言と成就という観点から福音を語ることができましたが、異邦人たちは聖書を知りません。そんな当時の文化人・知識人たちにパウロはどう福音を語ったのか。これは同じく異教社会で福音を伝える私たち日本人クリスチャンにとっても、注目せずにはいられない箇所です。

まずこの説教のきっかけについて見て行きたいと思います。パウロはこの時、アテネでシラスとテモテを待っていましたが、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じました。私たちだったらどうでしょう。パルテノン神殿を始め、多くの公共建造物、数々の彫刻作品・芸術作品を見て、畏敬の念を抱いたのでしょうか。しかしパウロは憤ったのです。私たちは主の祈りで「御名があがめられますように」と祈っていますが、それと全く反対の状況がそこに満ちていました。そこでパウロはさっそく福音宣教に身を投じます。17節にありますように、会堂に行ってユダヤ人や神を敬う人たちと論じたばかりか、広場に自ら出かけて行き、毎日そこに居合わせた人たちと論じたのです。

さて、その広場で出会ったのはエピクロス派とストア派の哲学者たちでした。パウロは彼らにどう受け止められたのでしょうか。18節に二つのことが書いてあります。一つは「このおしゃべりは、何を言うつもりなのか。」という評価です。もう一つは「彼は外国の神々を伝えてくれるらしい」というものです。パウロは「イエスと復活とを宣べ伝えていた」とありますが、「復活」という言葉はギリシャ語でアナスタシスという言葉で、女性の名としても使われる言葉でした。そのため彼らは、このパウロはイエスという男の神とアナスタシスという女の神について語っているのだろう、と受け取ったようです。そこで人々はパウロをアレオパゴスへ連れて行き、彼の新しい話をみんなで聞いてやることにしよう、としたのです。アテネ人は珍しいこと、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで日を過ごしていたからである、と21節にあります。

そこでなされたパウロの説教の内容を次に見て行きたいと思います。まず注目すべきは、彼はどこから話を始めたかということです。先にも触れたように、聴衆は異邦人ですから、いきなり旧約聖書を引用して話し始めることはできません。どこから始めれば、聴衆と聖書のメッセージを結びつけることができるでしょう。パウロは挨拶のことばを述べた後、23節でアテネの町にあった「知られない神に」と刻まれた祭壇について触れます。ある人はこの祭壇はアテネの町の伝説と関係があると考えます。このアテネには以前、疫病が流行しました。人々は神々の怒りを静めようと色々試みましたがうまく行きません。その時、この町の賢者が羊の群れを町の丘に連れて行って解き放ち、羊が止まった場所に「知られない神に」と記した祭壇を

築き、いけにえをささげた。この方法が功を奏して、この町は健康を取り戻したという話がその背後にあった、と。あるいはアテネの住民の中には神々を拝みつつ、どうもそれらは本当の神とは思われない。これでもない、あれでもないと感じる人たちがいたのかもしれませんが。そして私はそのお名前も、具体的なこともよく知らないが、とにかくそこにいらっしやる本当の神を礼拝したいと願い、「知られない神に」という祭壇を築いて礼拝していたのかもしれませんが。

これはキリスト教から見れば、人が神のかたちで創造されたことと関係しています。人間は神と交わって生きる存在として造られました。ですからその本質的部分として、神を求める心、いわゆる「宗教の種」が人間には植えつけられています。人は墮落によって、まことの神が分からなくなったとは言え、それでも神を求め、礼拝したいという衝動は、人間が人間である限り消えることはありません。どんな未開の部族にも宗教はあると言われていました。アテネ人もその衝動に動かされつつ、その神がどんな方か良く分からずに礼拝していました。パウロはその彼らの無知の告白を手始めとして、あなたがたが知らないと告白している神がどんな神かをお教えしましょうと言ってスタートしたのです。パウロはここでまことの神について4つのことを述べています。

まず一つ目は 24 節：「この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。」アテネ人は宮をこしらえれば、神はそこに住まわれると思っていました。しかしパウロはそうではないと言っています。まことの神はこの世界を造られた天地の主であって、小さな宮に閉じ込められるようなお方ではない、と。

二つ目は 25 節：「また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。」アテネ人は神のお世話をしたり、水をかけたり、磨いたりしていたのでしょう。しかしパウロは神は私たちに依存しておられる方ではなく、むしろ私たちが神にすべてを依存している者たちであると述べています。

三つ目は 26～27 節です。ここでは神はこの世に関わらない神ではなく、この世界の歴史を支配し、導かれる神であると言われていています。そしてこのことにおいて神はご自身をはっきりと私たちに示しておられる、とパウロは言います。ローマ書 1 章 20 節：「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」しかし私たちはそれを良く認めることができません。それはローマ書 1 章 18 節に書かれていますが、「不義をもって真理を阻んでいるから」です。神は私たちひとりひとりから遠く離れてはおられないのに、とパウロは言っています。

そして四つ目は 28～29 節です。パウロはまず 28 節で異邦人の詩を二つ引用します。前半はクレテ人エピメニデスのもの、後半はギリキヤ人アラートスのものです。パウロはなぜこれらの詩を引用したのでしょうか。それはこれらの詩は、キリスト教の観点からすればもちろん満足できるものではないとは言え、そこにある種の注目すべき洞察が含まれているからです。全部が正しいわけではありませんが、異邦人たちも神の偉大さがある意味でとらえています。そ

してパウロの意図は、それで異邦人たちをほめることではなく、このように一方で正しい洞察を述べながら、もう一方で偶像礼拝をしている彼らの矛盾を指摘することです。告白と実践が食い違っている。一貫していない！と。

こうしてパウロは 30 節でアテネ人にチャレンジします。「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」アテネ人はなぜ我々は悔い改めなければならないだろうか、とにもかくにも私たちが良いと思った神に礼拝をささげて疫病から守られたのと思ったかもしれません。今日の多くの人も同様に、なぜ我々は悔い改めなければならないのか。我々は何も間違ったことはしていない。我々の生活に何の問題も起こっていない、と考えるかもしれません。しかしパウロは、災いがあなたがたに下っていないのは、あなたがたの生き方が正しいからではなく、あなたがたの無知を神があわれみによって見過ごして来られたからだと言います。そしてもうその見過ごしの期間は終わりとなった、神は今すべての人に悔い改めを命じておられると言います。この時の変化は何によって生じたのでしょうか。それはイエス・キリストを神がこの世に送られたことによってでしょう。この方において神はご自身がどのような神であるかを、これまでよりももっとはっきり示しておられます。これ以上の啓示はもうないのです。そして神はこの方によって世界をさばくため、日を決めておられると言います。この方が神が遣わした特別の使者であることは、この方の復活において公に示されているとパウロは述べます。パウロはこうしてイエス・キリストの福音についての話まで持って来ました。詳しくは記されていませんが、復活の話がここに出ているということは、十字架についての話もなされたのでしょう。パウロにとって福音とはイエス・キリストの十字架と復活の福音以外にありません。彼は聖書を知らない異邦人の知識人たちを相手に、彼らの異教的な習慣や文学を題材として用いながらも、ついにこのイエス・キリストの福音にまでこぎつけたのです。そして天地の主が命じている悔い改めに進み、キリストへの信仰によって永遠の命の祝福を得るようにと訴えたのです。

この説教の結果はどうだったのでしょうか。聴衆の反応の第一はあざ笑うというものでした。ギリシャ哲学において魂は尊く、肉体は滅ぶべきより下等なものという二元論が支配的でした。ですから靈魂不滅の教えなら彼らは耳を傾けたでしょうが、肉体の復活をパウロが述べた時点で、ある人々はどうしようもない話だと失笑したのです。何と愚かで、無学な者の取るに足りない話かと。聴衆の反応の第二は「このことについては、またいつか聞くことにしよう」というものでした。「またいつか」というのは、「もう今は結構」「またいつか気が向いたら」ということで、結局は拒絶と等しいでしょう。パウロはこの反応を前にしてどうしたのでしょうか。33 節に「こうして、パウロは彼らの中から出て行った。」とあります。これを見る時、誰もがさみしく残念な思いを持つのではないのでしょうか。ここまで一生懸命語ったのに、このような反応を受けて、パウロは彼らの中から出て行かなければならなかった。アレオパゴスの評議所を去らなければならなかった。これがあのパウロがアテネで受けた扱いでした。すべてが無駄に終わったようでした。何の実りもなかったようでした。しかしこの 17 章にはもう一つの節が残っていました。34 節：「しかし、彼につき従って信仰に入った人たちもいた。それは、アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリスという女、その他の人々であった。」ここに全体から見ればわずかではあったが、信仰に入った者もいたと記されています。その一人はアレオパ

ゴスの裁判官デオヌシオ。裁判官は物事を良く判別して判断する人です。その彼がパウロの話聞いて信仰に入ったのです。パウロの話は裁判官の彼を説得して、信仰に導くに足る内容を持っていたということです。またダマリスという女も信じました。また「その他の人々」とありますから、他に複数の信じる者たちがいたのでしょう。ですから少なくとも合計4人は信じたことが分かります。果たしてこのアテネ宣教は成功だったのか、失敗だったのか。人数の多さからだけ見るなら芳しい結果とは言えません。しかしこの使徒の働き 17章は、このパウロの宣教を決して失敗としては描いていないでしょう。むしろこの記事は、宣教とはこのようなものであるということを示しているのではないのでしょうか。必ずしも信仰に入る者は多くないかもしれない。必ずしも成功には見えないかもしれない。多くの人があざけり、拒絶する。しかしその陰で救われる人も起こされていた！これは神のみわざです。神の豊かな報いです。神がパウロの宣教を用いてくださった。そう見る時、この章の結びは偉大な祝福を述べているものとして見えて来るのではないのでしょうか。よくぞこのアテネで、多くの異邦人に笑われ、軽くあしらわれる中で、このような回心者を得ることができた！と。

私たちも同じく異教の地で福音を伝える者として、このパウロの姿からチャレンジと励ましを受けます。私たちは果たしてパウロのように偶像礼拝を見て憤る者でしょうか。同じ心を持つ者になりたいと思います。またパウロのように人々との共通地盤を見出して一生懸命福音を語るべきことについても教えられます。異教的な信仰や習慣を利用しながら、そこにもある神と関係づけられる点をスタートポイントとしてまことの神を伝えて行く。天地の主は今やキリストにあって悔い改め、救いを得るようにと私たちに命じておられる、と。そして宣教の結果は主に委ねるということです。私たちに人を回心させる力があるわけではありません。真の回心は最終的には神の働きです。パウロのアテネでの働きは厳しいものでしたが、主は彼を用いてみわざをなしてくださいました。私たちもこの主を見上げて忠実に福音を語り、主の働きの前進に仕えたいと思います。主がこの働きを通して救われる人の数を多くしてくださることを祈り願いつつ。